九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

博物館体験再考 ： 「出会いを起点とした文脈モデル」による展示物 ： 来館者間相互作用過程の可視化

坂倉，真衣

https://hdl.handle.net/2324/4784729

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（感性学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	坂倉　真衣
論　文　名	博物館体験再考 －「出会いを起点とした文脈モデル」による展示物－来館者間相互作用過程の可視化
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　南　博文 副　査　　九州大学　　教授　　清須美匡洋 副　査　　九州大学　　教授　　三島美佐子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、1992年に出版された米国の博物館教育の研究者、Falk, J.H.とDierking, L.の提起した「博物館体験（The Museum Experience）」論とその改良版である2000年出版の「学習の文脈モデル（The Contextual Model of Learning）」を拡張し、来館者の博物館体験のプロセスを可視化することのできるモデルを確立することを目指した論考である。従来の博物館学が、提供者側の視点を暗黙に中心としていたのに対して、来館者が多様な個人文脈を持ったユーザーであり、館内の展示物という物的な文脈において、他の来館者や館のスタッフなどによる相互作用という社会的文脈との接合（interaction）を引き起こす「体験」に注目する点で、2000年代以降の博物館教育、運営における新しい潮流に本論文も位置づけられる。

第１章では、研究の背景として、インフォーマルな学習環境として「博物館」に着目し、そこでの「体験」に焦点を当てるに至った経緯、および本研究の目的について論じ、第２章では、Falk & Dierkingによって「博物館体験」という概念が提起される「前」「後」で何が変わったかについて文献検討を行っている。同書が、2000年代以降の博物館教育における理論的なターニング・ポイントとなったこと、その後、来館者の博物館体験の一般的な傾向を明らかにしようとする量的研究が多く行われている一方で、博物館体験の特殊性・多様性については未解明であることが明らかになった。

第３章では、Falk & Dierkingの「学習の文脈モデル」を拡張する方向として、従来のモデルに「場の理論」（Lewin 1951）及び「アフォーダンス理論」（Gibson 1979）を適用した新たな理論モデルの構築の手法が提案され、「展示物との出会い（encountering）」を分析の単位としてその具体的展開を可視化する「出会いを起点とした文脈モデル」とそれを現場において実証的に捉える方法論が提示された。

第４章では、自然史博物館における親子の体験過程について収集したエピソードの省察と、第３章で筆者によって新たに提示された「出会いを起点とした文脈モデル」を用いた体験のプロセスの可視化を行い、20のエピソードから、来館者と「展示物の出会い（encountering）」に関して５つのパタンを抽出した。来館者の個人的文脈と博物館の物理的文脈との間で、文脈内の要因同士の「ぶつかり（encountering）」を起こし、他の共同参観する者との社会的相互作用を通して文脈内に潜在的に存在をしている要因がさらに「引き出され」、「結びつき」、特定の意味をもつものとして「浮かび上がる」という出会いのパタンを見出している。さらに、展示物との出会いによって生まれる来館者側の学びの内実を「感覚的統合」「共同注視

による三項関係の発生」という理論概念によって解釈することに成功している。

第５章では、これらの結果を総括し、「出会いを起点としたモデル」による体験の可視化によって明らかになった博物館で起きる学びの特徴と学びに立ち会う関わり手のあり方について考察を行うと共に、本研究における未解決の課題と将来への展望について述べている。

以上のように、本論文は、博物館体験論に対する総括的な研究として最先端の水準を整理し、来館者と展示物との出会いの様相及び相互作用過程を検証可能な形で可視化した野心的試みとしてユーザー感性学における価値ある業績であると認められる。

最終試験

この論文について、論文調査会は、令和４年２月１９日16時より、新型コロナウィルス感染防止のためオンライン形式による論文公聴会（出席者、20名）及び口述試験を、坂倉真衣氏及び論文調査委員全員の出席の下で実施した。

論文内容について、坂倉真衣氏は論文調査委員および出席者からの質問（博物館という場の特殊性、観察者に見えないプロセスの扱い、長い時間軸での変容、インタープリター研修への適用など）に対して的確な応答を行い、質問者及び論文調査委員を満足させる回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格したものと認定した。また、坂倉真衣氏は、統合新領域学府を単位修得退学していることから、学位規則第16条第５項と第19条の学位取得者に求められる学力を持つこと及び外国語論文の読解を通して、自立して研究するにふさわしい外国語能力を持つことを審査委員会として確認した。

以上のことから、論文調査委員会は、坂倉真衣氏が博士（感性学）を授与されるのに相応しいと判断した。